

# 松本 金鶏城（まつもと・きんけいじょう）

## 1、プロフィール

俳人。史学者として親鸞研究が有名。碧梧桐と親交を結び、第二次全国行脚に同行するも、次第に離れ、乙字に近づく。俳論にも優れたものが多い。

<生没>

1880(明治 13)年 12 月 5 日 ~ 1958(昭和 33)年 1 月 14 日

<青森との関わり>

野辺地村(現野辺地町)に生まれる。中村泰山等と明治・大正の野辺地俳壇の隆盛に寄与した。

## 2、作家解説

松本金鶏城は本名を彦次郎といい、明治 13 年野辺地村(現野辺地町)に生まれた。生家は味噌の醸造業を営み、長男が家業に従い、次男である彦次郎は遊学し、明治 36 年京都帝国大学法科入学、翌 37 年には志を変じて東京帝国大学史学科国史学科に入学し直した。そして卒業後慶應義塾大学に就職、大正 4 年にはシカゴ大学客員研究生として米国留学。大正 7 年の帰国後は慶應義塾大学教授、第六高等学校教授、東京文理科大学教授等を務め、定年退官後は郷里に帰り、弘前大学野辺地分校で教鞭をとった。その間の研究成果は「鎌倉時代における宗教改革の諸問題」等の論文としてまとめられ、非常に高い評価を得た。

金鶏城が俳句を始めたのは、明治 32 年の頃で明治 33 年創立の地元の「笹鳴会」に所属し、機関紙「菅菰」の同人であった。

明治 40 年碧梧桐が第一次全国行脚で野辺地に2週間近く滞在した際、野辺地「笹鳴会」の同志鶯子、十二樓、泰山あるいは青森の山梶子らと連日のごとく句会を開き、その警咳に直接触れる機会を得た。そして、「ホトギス」「日本及日本人」に断続的に投句を始めた。なお、明治 41 年には大須賀乙字が野辺地に來町、句会を開催し親交を深めている。翌 42 年には碧梧桐の第二次全国行脚に同

行しているが、乙字と碧梧桐との確執が見え始めると次第に碧梧桐とは距離をおくようになり、乙字に近づくようになる。また、大正2年からは「懸葵」に俳論等を発表するようになり、選をも担当するようになる。一方地元野辺地では「手捏」が大正4年に創刊されているが、これにも留学先のシカゴより投句している。その他、六高教授時代には同校教授志田素琴主宰の「東炎」に参加し(昭和7年)同人となった。その句風は概して詠嘆的で、俳論にも本格的なものが多い。

### 3、資料紹介

○『松本金鶏城の俳句』

図書

1988(平成元)年 12月 30日

195mm×130mm

東京教育大学名誉教授で金鶏城の教え子である西山松之助と、同じく教え子で俳人でもある相場有流の編集になる。第一部は「松本金鶏城の俳句—ある明治俳壇外史—」と題して相場が記述、第二部は「金鶏城全句集」、三部が「金鶏城のエッセイ」となっている。